

チベット 語文語文法

レッスン17

以下は、はっきりと確立された文法事項ではなく、これまでの経験からいくつかの注意をあげるだけである。

1. 過去の助動詞

1.1 動詞の語根+ ས་ཡིན་

この表現は、多様な意味を持っている。単純に動詞+ས་ が動名詞であり、主語に対する述語となり、ཡིན་ は「である」という叙述をしていることがある。特に論書など哲学的な文献ではその例が多い。一方、誰かの活動を記述しているときには、既に終わった過去の表現に用いられる。しかし、場合によっては未来を表すこともある。動詞が変化をする場合には、動詞の語根の形が完了形か未来形かによって、過去を表すか未来を表すかが決まる。しかし、無変化な動詞の場合には、何れであるかは、コンテキストによる。

ཀྱུ་གཤམ་ལ་མ་ཕྱིན་ས་ཡིན། 「私はインドに行かなかった」

ཕྱིན་ས་ は འགྲོ་བ་ 「行く」の完了形であるので、過去の意味であることが分かる。しかし、これが「行ったことがない」であるのか「行かなかった」であるのかは、やはりコンテキストに依る。否定詞の位置にも注意すること。これがもし「である」の意味であれば、否定詞は མ་ཡིན་ と ཡིན་ の方に付くので、違いがあることは明かである。

1.2 རྩོད་

རྩོད་ は འགྲོ་བ་ 「行く」の完了形であり、動詞の語根に付いて、完了の意味を表す。

ལ་གཅིག་བརྒྱལ་རྩོད། 「一つの山を越えた」

1.3 ཟློན་

ཟློན་ は「～し終えた」という完了の意味を表す助動詞である。

སྐྱེས་བུ་རྒྱུང་དུ་དང་ཕུན་ཚོང་བའི་ལམ་གྱི་རིམ་ལ་ལ་སློབ་སྦྱོང་བ་བཤད་ཟློན། (LR)
「小土と共通の道の次第における心の訓練を説明し終えた」

1.4 ཡོད་ と འདུག་

「ある」「いる」という意味の動詞だが、他の動詞に付くと完了した状態「ていた」を表す。

མཚོ་མ་ཕམ་གྱི་ཕྱོགས་སུ་སྐྱབ་མཛད་འདུག་ 「マナラサロワル湖の方で修行をなさっていた」

འདི་རྗེ་བཙུན་གྱིས་བསྐྱམས་ཡོད་པ་ཡིན། 「これはジェツン〔ミラレーパ〕がお持ちになっていたものである」

*སྐྱོམ་པ། (མཛད་པ། བསྐྱམས་པ། བསྐྱམ་པ། སྐྱོམས།) 「運ぶ、携帯する、手に持つ」の敬語

2. 未来の助動詞

2.1 པ་ཡིན་

པ་ཡིན་ は過去・完了も表し、また動名詞を述語にして「である」という意味にもなり得る。コンテキストに合わせて訳をする必要がある。

བཤད་པར་བྱ་བ་ཡིན་ནོ། 「〔これから〕説明しよう」

*བྱ་བ་ は未来形

ལྷུང་བར་འགྲུར་བ་ཡིན་པ་ 「落ちるであろう」

*འགྲུར་བ་ はここでは、未来の助動詞であり、それにさらにཔ་ཡིན་ という助動詞が付いている。

2.2 動詞+ ལྟོ

動詞の語根にལྟོが付くと、「～されるべき」という、サンスクリット語の未来受動分詞のチベット語訳として用いられる。チベット語で書かれたものでも、意味は「されるべき」という訳の延長線上にある。

དབང་དང་གདམས་ངག་ལྟོ་བར་བ་ཡང་སྟེར་ལྟོ་ཡིན།

「特別な灌頂と教誡もまた〔私が〕授けよう」

ཡང་དག་པར་རྗེས་པའི་སངས་རྒྱལ་ལ་ ཇི་སྟེང་བ་མཁུན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཞེས་བྱ་བ། ཀུན་རྗེ་བ་མཁུན་པ་མི་མངའོ། །དེ་ལྟར་མཁུན་ལྟོ་ཡོད་པ་ལ་མ་མཁུན་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། མཁུན་ལྟོ་ཀུན་རྗེ་བ་མཛད་པས་དེ་མཁུན་པའི་ཡེ་ཤེས་མཛད་པའོ། (LRTG)

「正等覚は、あらゆるものをご存じの智慧と言われる世俗智をお持ちになっていない。そのようにご存じであるべきものがあるのに、ご存じでないというわけではない。〔というのも〕ご存じであるべき世俗のものが存在しないので、それをご存じになる智慧は存在しないのである。」

*この ལྟོ は「されるべきもの」という接尾辞である བྱ་ と同じような意味である。

སུ་ཏོ་བའི་ཞལ་ནས། ལྷོད་ཀྱིས་འཛི་བ་མི་རྟག་པ་མང་དུ་སོམས་ངང་། དེར་འཛི་ངེས་པའི་སྟོ་གཅིག་བྱུང་ན། ལྷིག་པ་སྟོང་བ་ལ་དཀའ་ལྟོ་མེད། དག་བ་སྐྱབ་པ་ལ་དཀའ་ལྟོ་མེད་པ་ཞིག་འོང་གི། དེའི་སྟེང་དུ་ལྷོད་ཀྱིས་བྱམས་པ་དང་སྟོང་རྗེ་མང་དུ་སོམས་ངང་། དེ་རྒྱུད་ལ་སྐྱེས་ན། སེམས་ཅན་གྱི་དོན་བྱེད་པ་ལ་དཀའ་ལྟོ་མེད་པ་ཞིག་འོང་གི། དེའི་སྟེང་དུ་ལྷོད་ཀྱིས་ཚོས་རྣམས་ཀྱི་གནས་ལུགས་སྟོང་བ་ཉིད་མང་དུ་སོམས་ངང་། དེ་རྒྱུད་ལ་སྐྱེས་ན། འཁྲལ་བ་སྟོང་བ་ལ་དཀའ་ལྟོ་མེད་པ་ཞིག་འོང་གི། ཞེས་གསུངས། (KZ)

「ポトワ御前は、あなた様は無常な死を何度も考えなさい。そこで死が確実であるという知が生

じたならば、罪を断じることには困難になるようなことはなくなり、また善を実現するのに困難になるようなことはなくなるであろう。その上であなたは慈悲を何度も修習しなさい。それが心に生じたならば、有情の利益をはかることに困難になるようなことはなくなるであろう。その上であなた様は諸法の実相である空性を何度も修習しなさい。それが心に生じたならば、迷乱を浄化することに困難になるようなことはなくなるであろう。」

ང་ལ་འདི་ལས་ལྷག་པའི་གདམས་ངག་གང་ཡང་སྟོན་གྱི་མེད།

「私にはこれ以上の教誡は何も説くことのできるものはない」

2.3 བ་ཡོད་ と བ་འདུག་

འོ་སྟོལ་དཔོན་སྟོབ་ད་གང་དུ་འབྱོན་བ་ཡོད། 「我々、師匠と弟子は、今はどこに行くのですか。」

2.4 未来を表す འགྲོ་བ་ འོང་བ་ ཡོང་བ་

བསྟན་པའི་སྟོར་ལུགས་པ་དེ་ཡང་ཚེས་ལུས་ལོ་དང་ཐོབ་ལོ་ཙམ་གྱིས་བསྟན་པའི་སྟོར་ལུགས་པར་མི་འགྲོ།

「教えの門に入るといふそのことも、法を求めよう格好や法を得たような様子をしてただけで教えの門に入ったと言ふことにはならない。」

*ལོ་ 「(副詞)様子、見たい目」

དེ་ལྟར་བྱས་ན་བར་ཚད་བསྐྱོད་སྟེ་འོང་། 「そのようにしたならば、障害は退けられるであろう」

*སྟེ་が本動詞と助動詞の間に使われている。

2.4 གྱིས་

助動詞としてのགྱིས་は、བགྱིད་པ་「なす」の命令形で、祈願などに用いられることはすでに説明した。しかし、場合によっては、祈願ではなく、主体の意志を示すこともある。

བུ་ལྷན་མོ་ལ་དགའ་ན་ངས་བསྟན་གྱིས། 「息子よ、見せ物が好きならば、私が見せてあげよう。」

ཚེས་སྟོར་བཟུག་གིས། 「法門に入らせよう」

3. 現在、あるいは持続を表す助動詞

3.1 持続を表す助動詞 གྱིན་ གིན་ གྱིན་ འིན་

変化は、属格助詞の གྱི་ などと同じである。現在時であれ、過去であれ、何かの動作が持続している(していた)ことを表す。

སྟོར་གྱིན་ཡོད་པ་ལས་། 「修習していたときに」

བུ་ཡོང་གིན་ཡོད། 「息子がやって来る」

ཁམས་ནས་བྱོན་པའི་ལམ་ཁར་དགེ་བསྟེན་ཞིག་ཚེས་བཤད་གྱིན་འདུག་པ་ལ་འང་མཉམ་པས་།

「カムから来る途中で、優婆塞が法を説いているのにも聞いたので」

3.2 持続を表す助詞 **བཞིན་**

རས་རྒྱུང་པ་ཐུགས་མི་རངས་བཞིན་ཕྱོན་། 「レチュンパは、お心に沿わないままで行った」
*ཡི་རང་བ་ 「喜悦する、賛成する」

3.3 現在進行を表す助動詞 **ཀྱི་འདུག་** **ཅིང་འདུག་**

རྩུ་འཕུལ་སྟོན་ཅིང་འདུག་། 「神変を示している」

4. 助動詞 **འདུག་** **གངལ་**

口語における用法と同様に、自分の発見した知識や経験を表すことがある。

ང་རྒྱལ་ཀྱི་བར་ཚད་ཅིག་བྱུང་འདུག་པ་། 「我慢に対する、何らかの障碍が確かに〔私に〕生じた」
བདེ་ལེགས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་འབྱུང་ཁུངས་སྤྱོད་པ་ལོན་པར་འདུག་།

「全ての善きことの源泉は確かにラマである〔と分かった〕」

དགེ་སྤྱོད་གཡེང་བར་འདུག་། 「善行は確かに散漫である〔と感じている〕」

རྒྱ་གར་ལ་ཕྱིན་པ་དོན་མེད་དུ་སོང་གངལ། 「インドに行ったことは、確かに意味のないものとなった」

དེ་རྗེ་བཙུན་སྐྱུ་ཡང་བགྲེས་གངལ། 「ジェツン〔ミラレーパ〕よ、今やお歳を召された〔ことがはっきり私には分かります〕」

*བགྲེས་པ། (མ་མི་དད་པ། 無変化) 「老いる」の敬語

5. その他の特徴的な動詞・助動詞

5.1 助動詞としての **འབྱུང་བ་**

この動詞は、単独では「生じる、出現する、起こる」という意味で用いられるが、他の本動詞と複合動詞となって、過去の時制を表す。複合動詞の作り方は、動詞の語根に直接**འབྱུང་བ་**が付く場合、動名詞に於格助詞が付いて **འབྱུང་བ་** に続く場合、動詞+ **དུ་** / **ཞིང་** / **རྒྱུ་** + **འབྱུང་བ་** などがある。

འདི་ལྟ་སུའི་མེ་ཆེན་པོ་འབར་ཞིང་བྱུང་ངོ་། 「このような大火が燃えていた」

མཇུག་དུ་བྱུང་བ་། 「お会いになった」

འཆི་རྒྱུ་མ་བྱུང་བ་། 「死ぬべきではなかった→いまだ死ぬはずはなかった」

བ་རྒྱུ་མ་བྱུང་། 「まだ食べていない」

5.2 助動詞としての **སྟོང་བ་**

単独の動詞としては「経験する、感受する」という意味であるが、他の動詞に後続して、「したこ

